

昭和の「国母」と仰がれた香淳皇后が九十七歳三か月余の天寿を全うされてから、はや満三年。昨日（十六日）は東京都八王子市の武蔵野東陵で三年祭が営まれた。

あの皇太后様に関して誰の臉にも浮かぶのは、まことに気品の高い膨やかな美しい笑顔である。確かに御健康で二男四女に恵まれ、昭和天皇の太后としての役割を立派に果たされたのだから、お幸せな御生涯であったといえよう。

ただ、決して御苦労がなかったわけではない。久邇宮邦彦王の長女として生まれた良子女王は、早くから皇太子裕仁親王のお妃候補と噂され、特に貞明皇后の御信頼を得て、早くも大正七（一九一八）年一月、満十四歳で東宮（皇太子）妃に内定。そこで、直ちに学習院女子中等部を中退し、久邇宮邸の中で特別にお妃教育を受け始められた。

ところが、二年後の大正九年に入り、良子女王の母方（島津家出身）に「色盲」遺伝の疑いありと懸念する一派から、久邇宮家に東宮妃の辞退を迫るような動きが現れた。それに対して断固反対したのが杉浦重剛翁（当時六十五歳）である。

近江膳所藩出身の杉浦氏は、東京大学でも英国留学中も理化学を修めた。しかし、早くから欧化政策の行き過ぎを正すため、「和魂洋才」の青少年育成を天職と考え、有志と創立した「日本中学校」の校長となり、やがて大正三（一九一四）年から東宮御学問所で「倫理」御進講掛を務め、同七年から良子女王への「倫理」御用掛も兼ねていた（29話参照）。

この杉浦翁は、具体的な人や物を例に引いて「倫理」を説いた。とりわけよく取り上げたのが郷里の偉人中江藤樹である。その影響で、右の騒動がおきたころ、良子女王は「吾が敬慕する人物中江藤樹」と題する次のような作文を書いておられる。

「藤樹先生の至誠純孝、躬行実践、民衆を感化したる平素の徳行は、啻に近江聖人として景仰するに止まらず、実に世界の聖人として尊崇すべき人格を表はせるものといふべし。……抑々孝は百行の本といへるが如く、古より其の名を顕はせる者にして孝子ならざるはなし……藤樹また実に孝心深く、其の生涯は孝を以て終始せり。……其の学、藤樹の如くなり得ずとも、其の徳は彼の如く進むべく、孜孜として勉むべきことを期す」

杉浦翁が最も重んじたのも「至誠純孝、躬行実践」であって、それゆえこの騒動の時にも、「皇室がいったん内定されたことを変更されたら倫理が成り立たぬ」と、本当に命がけて全力を尽くした。その結果、御内定通り御成婚が確定したのである。

ちなみに、大正十二（一九二三）年、湖西の滋賀県安曇川町に創建された藤樹神社（藤樹書院の近く）には、杉浦翁の仲介で下賜された良子女王の御清書になる右の御作文が宝蔵されている。